

続・蕎麦文学紀行  
白磁光明蕎麦猪口ものがたり  
I.肥前編

ほしひかる  
江戸ソバリエ協会 理事長  
農水省 和食文化継承リーダー

## 一、肥前佐賀藩・鍋島家のこと

「白磁の茶碗や皿小鉢が暗い台所に光を与え、清潔が白色であることを教えた功労は大きい」。

民俗学者柳田国男は『木綿以前の事』でそう述べています。

それまでの日本人は行燈の微かな燈火の下で、木椀や陶器などの地味な食器を使っていましたが、白磁の登場によって光明が射したように台所が明るく清潔になったというわけです。

その白磁(磁器)を日本で創り上げたのは、有田の朝鮮人陶工李参平<sup>イサンピョン</sup>(日本名:金ヶ江三兵衛)だったと伝えられています。

その参平の物語につきましては、黒髪酒呑童(筆名)という人が書いた小説『陶工李参平公の生涯 日本磁器発祥』がたいへん参考になります。

黒髪というのは有田にある山です。筆名からして作者はおそらく山と酒と、そして地元の有田をこよなく愛する人であろうことがうかがえます。

その黒髪氏の小説によりますと、参平の生まれは、忠清道金江(現:忠清南道公州市反浦面鶴峯里)で、一家は半農半陶の最下層の庶民だったようです。普通そういう人たちには姓がありませんので、ほんとうに「李」という姓をもっていたかどうかは確かではありませんが、ここでは伝説にしたがって「李参平」ということにします。

参平の家族は、文禄ノ役(1592-93年、日本軍16万兵)が起きて日本兵に惨殺されています。そこで参平は故郷を離れ、全羅道の南原で陶業修業をしていたところに、続く慶長ノ役(1597-98年、日本軍14万兵)で肥前佐賀の鍋島軍が攻めて来て、参平は捕えられました。後から見れば、これが参平にとっても日本にとっても運命の出会いであったということがいえます。

しばらくすると、豊臣秀吉の死の知らせが入ってきます。日本軍は一斉に朝鮮半島を撤退することになりました。鍋島軍も釜山浦を脱出、李参平は藩主鍋島直茂の重臣龍造寺六郎次郎家久(龍造寺隆信の末弟長信の嫡男)の船に乗せられ、佐賀へ向いました。

ここで、この稿の舞台であります肥前佐賀の成立について少しお話させてもらいます。

佐賀は主として二人の人物によってつくられました。

その二人とは、肥前を平定して「肥前の熊」と恐れられた龍造寺隆信と、肥前佐賀藩を作り上げた鍋島直茂のことです。

話は、隆信が20歳のとき龍造寺惣家を継いだことから始まります。

隆信は織田信長より5歳上です。当時、龍造寺家は、惣家の村中龍造寺(現:佐賀市城内1丁目)と、分家の水ヶ江龍造寺(現:佐賀市中の館)がありました。村中というのは龍造寺村の真ん中という意味です。館は私が通っていた県立佐賀高校を中心にして建っていたことが確認されています。ただ隆信は分家の身でしたから、隆信を惣家として認めないとする老臣が近隣の武士団と組んで隆信を攻めました。隆信はこれらと戦って勝利し、老臣に死を与え、組した武士たちを部下にしました。ところが、このころ隆信の生母が鍋島直茂の父清房の継室となりました。また直茂の生母も龍造寺家純の娘でした。こうしたことから隆信と直茂は一枚岩となって、共に東肥前・西肥前の戦いに明け暮れることになったのです。そしてこれらの戦いに勝ち抜いてきた1573年、ちょうど甲斐の武田信玄が卒したころでした。龍造寺軍は唐津を攻略し、唐津岸岳城の17代城主波多

三河守親みかわノかみちかしを従服させました。波多親は嵯峨源氏渡辺綱つなの子孫松浦党の実力者です。玄界灘を縄張りとしていましたから、南の有明海しか知らない龍造寺はついに北の玄界灘まで手に入れることになったのです。

そこで隆信は娘の安子姫を波多親に嫁がせました。それによって松浦党の他の面々も続々と龍造寺の幕下となったのです。

この安子姫の婚姻について、いまサラリと述べましたが、少し余計な事を書き加えます。実は安子姫は、父隆信がまだ西肥で苦戦しているときに強敵の小田氏に嫁がされていましたが、それを引き抜かれての再嫁だったのです。一方の波多氏にも正室がいましたが、その妻と離縁しての安子姫との婚姻でした。現代女性からは「何ということか」と非難されまじょうが、天下の信長も秀吉も家康も同じような対処をしています。要するにこれが「時代」なのです。それを言うともた叱られるかもしれませんが、過去の歴史は現在の目で見えてはいけません。そのかわりに歴史は決して過去に戻してはならない、という教訓をわれわれは得なければならないところです。

こうして、隆信は肥前を完全平定し、壱岐、対馬、筑後、筑前、豊前と、肥後の半分を従えました。隆信は50歳になっていました。

そして1580年、九州北部の龍造寺氏は南部の島津氏と手を打ちました。これによって隆信は「五州二島の太守」とよばれるまでになりました。

その2年後、「天下布武」を印章にしていた織田信長が本能寺ノ変の炎の中で腹を切りました。そのまた2年後、隆信は島津・有馬の連合軍と島原で戦いましたが、何と！ 連勝の太守が討死してしまったのです。

一番驚いたのは、鍋島直茂だったでしょう。あの秀吉は即刻信長の敵討ちを果たし、諸国の戦国大名たちをアツといわせましたが、直茂は敵討ちに走らず、

隆信が手中にした肥前を固めることにしました。秀吉もこれを認め、鍋島直茂は肥前領主の跡を継いだのです。

そして1592年、日本の全権力を握った太閤秀吉は、こともあろうに朝鮮出兵の挙に出ました。これが文禄ノ役、慶長ノ役です。秀吉の海外侵略には大義がありませんでした。あえていえば、家臣への褒賞の地を海外に求めたことか、あるいは朝鮮の見事な茶碗を手に入れたかったこととか蔭口をいわれていますが、当時は天下人の秀吉に誰も逆らうことができませんでした。いつの世も権力者の暴走を止めるのは権力者自身の死しかありません。秀吉もそうでした。

秀吉が死んで、日本軍は引き上げました。各藩の船には多数の朝鮮人が乗っていました。陶工として使おうと無理に連れて来た藩もありました。なかには終戦になって、今まで日本軍に協力したことを同邦の者から責められることを恐れて自ら国を去る者もいました。とくに九州各藩は多くの者を伴っていましたが、九州以外では後の萩焼、楽焼などの祖となる人たちもいました。なかでも鍋島藩が連れ帰った朝鮮人陶工は数千人と飛びぬけて多かったようです。

なぜ？これが私の疑問でした。そこで黒髪氏に尋ねてみますと、唐津窯の影響ではないだろうかということでした。

唐津窯の影響、なるほどあり得ます。

波多氏の唐津にはすでに陶器を焼く窯がありました。そこで働いていたのは朝鮮人の陶工たちでした。玄界灘を縄張りとする松浦水軍は朝鮮半島とも自由に往来していましたから、波多氏の下には朝鮮からの渡来人が多くいたのです。そして彼らこそが日本で働く朝鮮人陶工の初めでした。そしてここで焼かれていた器は「奥高麗」とよばれていました。

鍋島軍の龍造寺家久は、その波多氏に嫁した安子姫といとこ同士でした。ですから波多氏が朝鮮陶工たちを保護し、陶器作りを奨励し、さらに窯を厳重に管理していることを聞いていたと思われまます。ただ、いとこの安子は美人でした。そのため天下人秀吉は安子姫に夜伽ぎを命じたといわれています(加藤唐九郎

『陶器大辞典』)。もちろん夫である親<sup>ちかし</sup>はこの無理難題を拒絶したでしょう。すると突然、波多氏は秀吉に改易されたのです。これに伴って波多の朝鮮人の陶工たちは離散し、それは世に「岸岳崩れ」とまで言われました。私は、「岸岳崩れ」という言葉が生まれ、また伝わっているくらい、この出来事は肥前の人にとって忘れられない事件であったと考えます。家久もその一人だったでしょう。

しかし、肥前鍋島藩だけが磁器王国になったのは、唐津藩の影響だけでしょうか？疑問はまだ残ります。

秀吉没後の天下は、「厭離穢土 欣求浄土」を旗印にしていた徳川家康が手中におさめました。当初家康は鍋島藩を秀吉方と見ていました。そのため筑後の柳川藩を討てば徳川側として認めるとの難題を突き付けてきたのです。隣接している柳川は佐賀と関係の深い地域でした。私の佐賀高校時代でも、福岡県の柳川から通っている生徒がいたくらいです。鍋島直茂(藩祖)とその嫡子勝茂(初代藩主)は、藩のため、家臣のためとやむなく兵を挙げましたが、鍋島の兵たちも同士討ち同然の戦を涙ながらに戦った、との黒髪氏の小説の誠実ある描写に、私も然りだと思えます。

こうして成立した肥前鍋島藩の地図を見てみましょう。

江戸時代の鍋島藩は有明海沿岸が領地で、本藩と、三支藩(蓮池藩=現:佐賀市蓮池、小城藩=現:小城市、鹿島藩=現:鹿島市)と、幾つかの自治領(村田、白石、田久保、久保田、多久、須古、川久保、諫早、神代、深堀)からなっていました。この自治領というのは、たとえば多久は鎌倉御家人多久氏の領地ででしたが、龍造寺隆信に攻められ没落したので、多久領に龍造寺隆信の末弟長信の嫡男龍造寺六郎次郎家久が入りました。もちろん鍋島直茂の重臣としてでした。



【江戸時代 佐賀鍋島藩(太線内)】

ただ、この家久は1608年に龍造寺姓を捨てて**多久長門守安順**と名乗るようになりました。おそらく家久は、九州の龍造寺氏も島津氏も、中央の織田信長や徳川家康に比べると人物の大きさがちがうことが分かったのでしょう。なぜなら幼いころから伯父隆信を知っていた家久は、性格的には伯父と信長は同じだったことを感じていたのですが、「天下布武」を印章にしていた信長、「厭離穢土欣求浄土」を旗印にしていた家康のその文言が、日本という地図、あるいは大きな日本史のなかに、然と位置づけられているような気がしたのではないのでしょうか。

ともあれ、家久(安順)の改姓は、徳川天下の中で鍋島の秩序を守り、ひいては鍋島をして佐賀藩を発展させるという彼なりの決意であったかと思われます。

それを裏付けるような漢<sup>おとこ</sup>振りの逸話が多久安順にあります。

1634年、藩に鍋島騒動というのが起きています。龍造寺氏の嫡流を名乗る者が突然登場し、幕府に訴え出たのです。自分こそが龍造寺家の正統な血筋の者、佐賀藩は自分のもの、と言うのです。佐賀藩筆頭家老の多久安順はこれを苦々しく思います。幕府にとっては龍造寺家が正統だろうが、鍋島家がどうだろうが、どうでもよいこと。佐賀藩が揉めればそれを理由に改易されるだけのこと。それも判らん大馬鹿者、貴様は佐賀を潰すのかと、江戸城に乗り込み「庶子の身で嫡流とは笑止。龍造寺家に嫡流があるとすれば隆信の甥である己自身が最も相応しい。だが、鍋島家が正当なことはすでに家康公がお認めのこと」と主張し、一連の騒動を封じました。

おそらく安順は、波多氏改易後に入って来た徳川派の新領主寺沢氏による厳しい波多残党狩りやら、「岸岳崩れ」とまでいわれたほどに露頭に迷う領民が出たのを見て、鍋島家の下で佐賀を発展させていくことこそが、伯父隆信への供養と判断したにちがいありません。その発展策として、波多氏に倣って陶磁器を佐賀の殖産とする構想みたいな思いをもっていたのかもしれない。

鍋島家にはもう一人直茂が頼りにする国家老鍋島<sup>しょうきん</sup>生三入道がいました。この生三入道も骨のある人物として伝えられていますが、この兩名の家老が信長、秀吉の死、そして家康の天下統一という荒波のなかで、藩祖直茂と一枚岩となって肥前藩経営に当たったといわれています。

話は逸れますが、佐賀鍋島藩は、面白いことに江戸初期と幕末に名君が出ています。それは江戸初期の藩祖鍋島直茂と幕末の十代藩主鍋島直正です。

10代藩主直正は維新を実現させた人物として有名です。司馬遼太郎は「幕末、佐賀藩ほどモダンな藩はない。軍隊の制度も兵器も、ほとんど西欧の二流国なみに近代化されていたし、その工業能力も、アジアでもっともすぐれた「国」であったことはたしかである。佐賀藩の「文明」に比べれば諸藩など、およびもつかなかった」と述べているほどです。

この二名の名君に共通しているのは、時代を読み取る力です。ここでその証をいちいち掲げることは省きますが、藩祖直茂は、戦乱の時代はもう終わった。これからは国の経営だ。佐賀藩の産業を育成しなければならない、と目を付けたのが朝鮮で観た磁器生産だったのだと思います。だからの多くの陶工を連れて来たのです。ここが他藩とちがっていました。直茂は「佐賀藩(クニ)づくりの設計図の柱」として、白磁生産を二名の家老たちに指示したことは十分考えられます。

## 二、有田の中野神右衛門清明のこと

さて、徳川家康が江戸開府(1603年)をしてまもないころ、多久安順の保護下で陶器を製作していた参平が、どういうきっかけだったかは不明ですが、1605年ごろ有田の泉山に良質の白磁石鈹を発見したと伝えられています。見知らぬ異国の地での探索は、参平一人ではできません。安順がもっとも信頼する家臣中

野神右衛門清明、そして他の朝鮮人たちの情報や協力なしでは結果が出ないことは明らかです。もともと中野氏は現在の武雄市朝日町中野を本貫とし、武雄塚崎の地頭後藤氏の一族でしたが、現在は多久安順に仕えています。

白磁石を発見した参平は、これまでの土と新しい白物(白磁石)の違いを小説の中でこう述べています。

「これまでの焼き物は山から掘ってきた土を水甕に入れて泥水にし、これを竹箆で何度も漉し、陶土にして使う。

白物は白く堅い石をまず粉碎して水甕に入れ、粘りがでた白い泥を竹箆漉し、白い陶土にして使う」と。

さらに参平は、白磁石を発見した天狗谷は、必要な水も薪も十分補給できる環境だと付け加えています。

これより以降、有田の磁器は材料、焼成法など陶器より難しいため、高級品として大事に扱われていくことになるのはご承知の通りです。

そして1614年、安順は家臣中野清明を伊万里代官西目一通り心遣い役(直茂の代わりに伊万里郷・有田郷・山代郷の西目三郷を治める役職)に就かせることにしました。

伊万里はかつて松浦党伊万里氏の領地でしたが、今は鍋島領です。家久と清明は先を読んで、伊万里津を押さえたたかったのでしょう。やがて二人の読み通り伊万里津は伊万里焼の荷出しで賑わうようになりました。

ともあれ、参平が製作した磁器は中野清明⇄多久安順⇄藩主鍋島直茂公に献上されました。これが有田焼の創業の年とされている、1616年のことではないかと思えます。

このように、多久では慌ただしい動きがありましたが、全ては参平の磁石発見に発すると言ってもまちがいないでしょう。

1603年、江戸開府

1605年、参平、白磁石発見

1608年、龍造寺家久、多久氏へ改姓

1614年、中野清明、伊万里代官に

1616年、多久氏、鍋島直茂公へ「磁器」献上

多久安順は、参平の功績を称え、出身地から名をとって「金ヶ江三兵衛」と名のらせました。

そして、1620年に中野清明が、1641年に多久安順が亡くなりますが、多久家の二代目は茂辰が継ぎ、1647年中野清明の次男山本神右衛門重澄が初代皿山代官として、伊万里有田地方の管理役に就きました。

中野重澄の姓が変わって山本重澄になったのは、山本助兵衛宗春の養子となったためです。その養子縁組の間をとったのが多久安順・茂辰父子だったので、多久安順と中野清明は深い信頼関係にあったのでしょう。ですから安順の「有田磁器」への思いは、多久茂辰、山本重澄へとうまく引き継がれていきました。

こうして、多久、山本に保護された金ヶ江三兵衛(参平)は、有田天狗谷窯に窯を築き、そして後には登り窯が築かれ、現在に近い窯業体制が確立することになります。

また、有田陶磁史としては、金ヶ江三兵衛の他に、家永正右衛門、高原五郎七、百婆仙などの多くの名が伝えられています。しかし三兵衛は多久家お抱えの陶工でしたから史料に記録されていますが、他の陶工たちの足跡は明確ではありません。

そのなかの百婆仙(朝鮮名:朴貞玉)というのは、武雄領の朝鮮人陶工辛島十兵衛(朝鮮名:張成徹)の未亡人でした。百婆仙は夫亡き後に朝鮮人陶工約 100 人を引き連れて、有田へ入って来たと言われています。

武雄領は先の地図で見たように自治領です。ですから百婆仙一団が武雄を出て、鍋島領へ行くことを武雄藩が簡単に許したのだろうかという疑問をもつところですが、そこはおそらく武雄出身の中野一族が上手く手を打ったのでしょう。

ところで、この百婆仙を主人公として書かれた小説に村田喜代子の『龍秘御天歌』というのがありますが、なかなか面白い小説です。

百婆仙は「故国を離れて暮らすことは仮面をかぶって生きること」と言っていますが、この「仮面」が村田の小説の主題でもあります。

百婆仙は、死んだときぐらいその仮面を外してやりたいということから、夫の葬儀は朝鮮式でやると宣言します。一言でいえば、「哭踊」といわれる、激しく哭き、叫ぶ、あの様式です。ですが息子は、反対して日本式の仏教葬式を決行します。母の気持を十二分に感じながらも、これからは日本人として生きていかなければならない息子の苦悩が描かれているのですが、これは参平はじめ多くの朝鮮人陶工たちの声なき声だったのでしょう。

ところで『龍秘御天歌』の中にはソバリエとして見逃せない箇所があります。

「・・・蕎麦湯を配り終えたところだった。これを飲んで酒気を覚まして夜道を帰ってもらうのだ。」

そういえば、韓国江原道 <sup>チュンチョン</sup> 春川の《マックス》はつゆが少ししかないから、蕎麦湯を飲みながら麺を食べると聞いています。

ところが、日本では蕎麦湯を飲むという慣習は、信州諏訪を経由して江戸に入ってきたと、江戸中期の史料『蕎麦全書』に出てくるため、蕎麦湯は国内発祥のように思われています。しかし、眼を世界に向けるとどうも違うような気がするわけです。

さて、百婆仙は「秀吉の欲した茶碗が、こんな茶の湯の侘びなどとは真反対の陶工の手で作られたとは皮肉な話だ」などと痛烈な言葉を吐いていますが、そうであるとしても、参兵衛ら朝鮮人陶工はむろんのこと、この初代皿山代官山本神右衛門重澄らによって、肥前窯業の基礎は築かれて、さらなる発展をとげていったことはまぎれもない史実です。

なお、この重澄の子が『葉隠』の口述者の山本神右衛門常朝です。

しかしながら、あの有名な「武士道とは死ぬことと見つけたり」は、鍋島磁器とどう関係するのでしょうか。

《参考》

- \* 柳田国男『木綿以前の事』
- \* 黒髪酒呑童『陶工李参平公の生涯 日本磁器発祥』
- \* 村山伸明「葉隠奇譚 肥前高麗谷～中野神右衛門一代記」(『葉隠研究』)
- \* 奈良本辰也『葉隠』(中央公論社)
- \* 石川和男「西肥前陶磁器と商人活動-伊万里津における商業活動を中心として-」(専修大学社会科学研究所月報 2020年 89月合併号)
- \* 村田喜代子『龍秘御天歌』
- \* 黄慧性・石毛直道『韓国の食』(平凡社)